The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	文脈主義と不変主義 ： 叙実的知識帰属という観点から
Author(s)	福田, 佑二
Citation	年報人間科学. 2010, 31, p. 83-94
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/10935
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

〈研究ノート〉

文脈主義と不変主義：叙実的知識帰属という観点から

福田　佑二

〈要旨〉

知識は伝統的に一定のものであるとされてきた。それは、人が誰かに知識帰属をする場合、常に一定の認識論的性質がその人に帰属されることを意味する。だが、「知る」という語の実際の振る舞いはそれを反映していない。すなわち、使用の状況と相対的に「知る」の振る舞いは変動しているように見える。文脈主義は、まさにこの観察を「知る」の意味論に反映しようとする。他方、意味論的な意味でのこのような変動を認めないのが不変主義である。このように、文脈主義と不変主義の対立は、意味論と認識論、さらに語用論も含めて、広範な関心の元で現在活発に論じられている。本稿ではこの論争で問題にされている知識帰属のあり方に注目し、彼らが問題にしているものが叙実的な知識帰属である限り、文脈主義の側に説明を要する問題が浮上するということを論じる。

キーワード

文脈主義、不変主義、知識、知識帰属、意味論

1　はじめに

本稿で問題になっていることを一般的な仕方で表現するならば次のようになるだろう。すなわち、状況によって要求される知識の強さには揺らぎがあるという強い直観がわれわれにはあるように思われるが、これを哲学的な理論としてどう整合的に説明できるか、である。われわれはこの問題を、知識帰属という一種の言語的実践を拠り所として考察する。とある話者Aが、とある主体Sに知識を認めるとき、話者Aは、「SはPと知っている」と発話する、あるいは考える。このとき、この「SはPと知っている」という文は、主体Sがとある命題Pを知識として持っていることを意味する、と解釈するわけである。したがって、当初の問題は、この知識帰属文の振る舞いの揺らぎ（に見えるもの）を理論的に説明することとして捉えなおされる。

私は、このような問題について現在真っ向から対立している、文脈主義と不変主義を取り上げる。その上で、叙実としての知識帰属の健全さ、という観点から、文脈主義と不変主義の対立点に迫りたい。結論として私は、この観点について文脈主義者に説明を求めることになる。

本稿の構成は次のとおりである。まず導入として、文脈主義と不変主義の立場を確認し、かつ、二つの立場が共有するひとつの観点を確認する。それは、知識帰属を実践的な意思決定と絡めて考えるという観点である。次に、本稿で問題になる限りでの、文脈主義と不変主義の対立点を確認する。これはいわゆる、帰属者文脈主義と主体感知的不変主義の対立である。[1] その結果、文脈主義には、帰属者の実践的事実を主体の事実と見なそうとする不正な（と思われる）手続きが含まれていることが判明する。これは、叙実としての知識帰属ということを考える限り、文脈主義者にとって説明を要する問題である。

2　文脈主義と不変主義――実践的知識帰属への眼差し

文脈主義の一般的なテーゼは、「SはPと知っている」という形式の文の真理条件が文脈ごとに異なりうる、というものである。ただし、これを理論的にどう実現するか、あるいは、そもそもこのテーゼをどう解釈するかは一様ではない。代表的な文脈主義者の一人 Keith DeRose は、その差異を生み出す要因をその文脈の切迫度に見る。[2] 具体的には、その知識主張をすることでその話者が結果的に引き受けることになるコストの大きさと相対的に、当の知識文の真理条件が変わるとされる。DeRose の、銀行の例に即して説明しよう。[3]

金曜の午後、ハンナとサラは、給与手形を預金するために仕事帰りに銀行に寄ろうとしていた。ところが、ちょうどその銀行にさしかかったとき、窓口が非常に混雑しているのが見えた。そこでハンナは、土曜の午前にもこの銀行が開いていることを知っているから明日出直そうと言った。ハンナはちょうど二週前の土曜にもここに来ていて、この銀行が営業していることを確認していたのである。

他方で、ハンナの口座には大きな引き落としが月曜に予定されているとしよう。さらには、その口座の貯蓄額がその引き落としに対して不足

しているとしよう。彼女は、その給与手形を今週中に預金しないと不渡りを発生させてしまうのである。ハンナの置かれている立場を理解したサラは、ここ二週間でその銀行が営業時間を変えたかもしれない、というハンナが考慮すべき可能性に言及する。このような場合、ハンナはそれでも上と同じ証拠に基づいて、土曜にその銀行が開いていることを知っていると言うだろうか。言わないように思われる、というのが文脈主義者の直観であり、さらには一般的にも認められうる直観であろう。(4)

文脈主義者はこのように、同じ証拠に基づいた知識帰属の揺らぎをここに見るのである。そして、この揺らぎを真理条件の揺らぎと見なすところに文脈主義者の主張がある。というのは、このような知識文の振る舞いに対する直観が、知識文の真理条件の振る舞いをそのまま反映している保証はないからである。したがって、この文脈主義者の主張に対する有力なオルタナティブとして、主張の適切さの揺らぎをこの例から読み取るという語用論的なアプローチがある。たとえば、Peter Unger にその典型が見られるような懐疑論的な立場からすれば、ハンナはいずれにせよ銀行が土曜に開くかどうかを知らないが（つまり、その真理条件はこの文を常に偽にするようなものとして一定だが）、不渡りの可能性が生じる以前は、その「知っている」という発話は語用論的に適切であり、その可能性が生じた以後は不適切になった、と論じられる。つまり、前者においてハンナは、適切だから「知っている」と発話したが、後者においては不適切だから「知っている」とは発話しないように見えた、ということである。このように、知識帰属文の振る舞いについてのこのような直観は、語用論的な直観を反映していると考えることもできるわけである。(5)

したがって、これが真理条件の変動であると主張するためには、さらに何かが主張されねばならない。そこで DeRose（1999: pp.198-200）は、意味論的とされる直観を語用論的なものとして安易に処理することのコストに言及する。要するに、意味論がその係留点を失ってしまうのである。あらゆる言語使用上の直観が語用論の側から説明されてしまうならば、どのような反直観的な理論であれ、自然言語の意味論は奔放にその理論を構築することができる。それはちょうど、先ほどの懐疑論的不変主義に見られた戦略である。知識文のほとんどすべては偽であるが、われわれがしばしばそれを真であると感じるのは、その文がその会話にとって適切だからである、というのがその骨子であった。もちろん、語用論的に処理されることが適切な直観など存在しないというわけではない。問題は、この戦略が余りにも奔放かつ安易に応用できてしまう点にある。(6)

こうして文脈主義者は、真理条件の変動という方針を掲げてこの問題に取り組む。そして DeRose は、この真理条件の変動を、それぞれの文脈のコストの違いから説明するわけである。

ここで、コストと知識帰属の関係についてもう少し詳しく述べておいた方がいいだろう。文脈主義者は、知識帰属を実践的な意思決定と結び付けて考える。たとえばこの例では、銀行が明日開いているかどうかについての信念が、不渡りを回避するために何をなすべきかという意思決定の非常に重要な材料になっている。おそらくハンナは、不渡りを生じさせることで非常に面倒な事態に陥ることになるだろう。これが、わ

れわれが言及しているところのコストである。ハンナはこのコストを回避したい。他方で、できればこの行列にも並びたくない。ベストな選択は、明日改めて銀行に来ることだが、これが本当にベストであるためには、明日もこの銀行が営業しているということが確実でなければならない（ついでに言えば、土曜の銀行は一般的に空いているということ、そして、日曜は営業していないということも確実でなければならないのだが）。だからこの件についてより確実な証拠が求められる。この、コストがある場合とない場合に要求される証拠の強さの違いが「知る」の真理条件に影響を与える、というのが文脈主義者の想定している事態である。このように文脈主義者は、意思決定のための知識帰属で生じうる事態を意味論的に尊重しようとしている。

他方、このような文脈主義に異を唱える立場として、不変主義と呼ばれる立場がある。今回は、Jason Stanley の関心相対不変主義（Interest Relative Invariantism。以下ＩＲＩと記す）を参照する。

ＩＲＩは、積極的に知識の理論にコミットせんとする立場である。文脈主義は、懐疑論対策のような認識論的関心をその出自とする立場だが、いまやそれは、「知る」の意味論を論じる言語哲学的立場にシフトしている。したがって、「知る」という表現を真にする信念が、認識論的にどのような価値を持つ信念か、という点には意図的に踏み込まないできた。それゆえ、上で、知識帰属を意思決定と関連付けて考察すると言われる際も、この関連付けの認識論的な意義をどう考えるかは曖昧なままであった。しかし、Stanley はこの点について積極的な主張をする。すなわち、知識に実践的因子を加味する知識の理論を尊重する立場としてＩＲＩを提示する。言い換えると、実践的な知識帰属を、いわゆる知識の一特殊事例と見なすのではなく、実践的な知識帰属にこそ知識の典型例があると彼は考える。（なお、Stanley 自身は、ＩＲＩを知識についての形而上学として提示している。[7]）しかし、今回は、文脈主義と不変主義の言語哲学上の対立にその焦点を当てるために、形而上学としてのＩＲＩを意味論的に尊重する意味論的ＩＲＩを想定している）

Stanley 曰く、伝統的に認識論は、知識に真理寄与的因子（truth-conducive factor）を見てきた。伝統的に知識は、正当化された真なる信念に、ゲティア問題を回避できる何かをプラスアルファしたものだとされてきた。この、正当化にせよ、プラスアルファの要素にせよ、それらは常に、より確実な真理を目指すための要素であり続けた。たとえばそれが、知覚の信頼できるプロセスであるといわれるとき、これは、そのプロセスが当の信念を真理とするのに信頼に足る、ということが意図されていた。ところが Stanley は、知識の中に真理を志向しない要素を見る。それが、上で言われた意味でのコストである。こうして、その信念が知識であるということは、その人の実践的事実と証拠的事実のある種のバランス、および世界の状態に関連する、という新たな図式が提示される。[8]

しかし、それはまさに文脈主義者が述べていることのように見える。だが、Stanley 自身はこの点でも文脈主義とＩＲＩを区別する。というのは、Stanley は文脈主義を、伝統的な認識論から抜け出しきれていない立場として理解しているからである。[9] とはいえ、私はここで、Stanley の文脈主義批判をこれ以上追いかけることはしない。というのも、文脈主義者がこの実践的な因子の認識論的地位についてどう考えているの

か、いまだはっきりしないところがあるからである。[10] ここで重要なのは、文脈主義も不変主義も、少なくとも知識帰属において実践的な因子を重視しているという点である。

3　文脈主義と不変主義の対立点

私が注目したい二つの立場の対立点は、Stanley（2005）以前から一般的に指摘されてきたものである。その対立とは、そのコストの担い手を帰属者の側に設定するか、主体の側に設定するかという問題である。たとえば、Aという人物が「SはPと知っている」と発話した場合、不変主義者は、この文の意味論的値に影響するのは、Sのその時のコストであると主張する。これに対し、文脈主義者にとってのそれは、Aの想定するコストなのである（上の例では、主体と帰属者が同一であったがゆえに、この問題が浮き彫りになることはなかった）。したがって、文脈主義者は、この「SはPと知っている」という同じ文が別の文脈の別の人物によって発話された場合、その意味論的内容が別のものになりうると主張する。しかし、不変主義によると、誰がどのような文脈でそれを口にしようと、S、P、そしてSにその知識が帰属される時点が同じである限り、その意味論的内容は不変である。

この点について、文脈主義が拠り所とするその根拠は、次のようなケースに見られるわれわれの直観にある。ここでは、上で引用した銀行のケースの亜種を挙げたい（Stanley 2005: p.5 に由来）。

上の例と同じように、ハンナとサラは金曜の午後に帰宅中であり、給与手形を銀行に預金しようと考えている。さらにハンナは、月曜に、自分の口座に大きな引き落としが予定されていることをはじめから認識している。ところが、ここでも銀行は大変混雑していて、できれば預金手続きを別の日に引き伸ばしたいという状況である。そこでハンナはビルに電話して、その銀行が明日の土曜も営業していることを知っているかどうか尋ねる。ビルは、二週間前の土曜にそこが開いていたことを根拠に、「その銀行が土曜に開いていることを知っている」と主張する。しかしハンナは、自分が現在おかれている立場に鑑みて、「ビルは土曜に銀行が開いていることを知らない」とサラに語る（図1参照）。

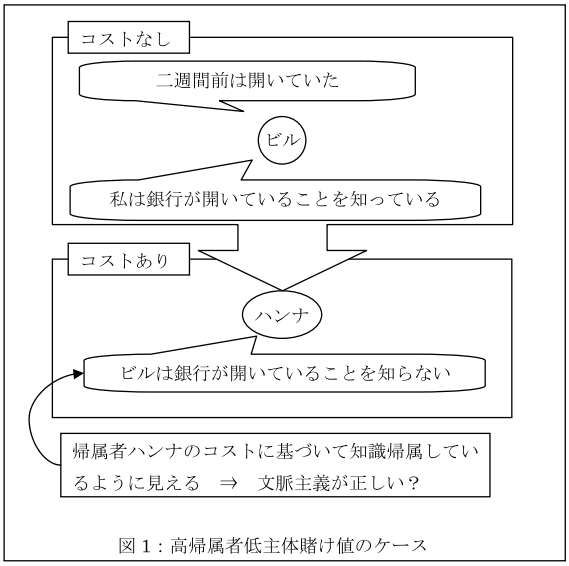

図1：高帰属者低主体賭け値のケース

この例の要点は、この最後の「ビルは土曜に銀行が開いていることを知らない」という知識帰属文について、帰属者であるハンナは高いコストを引き受けているが、主体であるビルは何のコストも引き受けていない、という点にある（したがってStanleyは、このようなケースを「高帰属者低主体賭け値（High attributor-Low subject Stakes）」と呼ぶ。またそれゆえ、当の質問をされたビルは、設定上、ハンナの置かれている状況を知らない状態でハンナと会話している）。そしてこのようなケースでは、帰属者ハンナが自身のコストに照らしてビルに知識帰属を行っているように見える（だから「知らない」となる）。つまり、文脈主義の方が正しいように見える。これに対してＩＲＩをこの例に適用すると、この知識文の真理値は、ビルのその時のその命題に対する実際のコストから診断されねばならない。ビルは設定上、当のコストを引き受けていないのだから、ＩＲＩによると、彼は「知っている」のでなければならない。

4　文脈主義の問題点――叙実的知識帰属という観点から

そこでStanleyは、この例は彼が問題にしている実践的な知識帰属の例として適切でない、という仕方でこれに反論する。[11] Stanleyが、特にその直観の参照点として見据えているのは、実践的な知識帰属の典型は自らの知識にしたがって自ら行為するところにある、というものである。したがって、Stanleyにとって知識帰属が実践的であるということは、それにしたがって自らが行為を引き受けるというところにある。それゆえ、自分の行為に関係のない他人の知識状態に何らかの判断を下す例は、肝心の直観を刺激しないとされる。つまり、この例では実践的な知識帰属ではない別の何かが行われている。

とはいえ、状況が実践的であるからこそ、自分の行為のために他人の知識状態を参照するという場面が生じうる。それがまさにこの例に現れているとStanleyは考える。そこで、この例でハンナがやろうとしていることを改めて考えてみよう。この例における彼女の関心は、銀行が明日開いているかどうかに関する、自分のコストに見合った証拠を手に入れることにある。したがって、「彼女ら［ハンナとサラ］がビルから知りたいことは、彼が彼女らの実践的状況にあったならば、それは知識として十分だろう、というような証拠を彼が持っているかどうかである」（Stanley 2005:p.102）。設定上、ビルの証拠は彼女らの状況にとって十分なものではないのであった。だからこそ、ハンナはビルについて「知らない」と述べたのである。彼女らは、実践的ではあるが、反事実的な知識帰属をしているのである。

さて、ことによると文脈主義者は、われわれはまさにこのことを言っているのだ、と言うかもしれない。つまり、文脈主義が扱っているのは、主体がもし帰属者の立場にあったならばその主体は知っているかどうか、という反事実的な知識帰属の事例なのだと言うかもしれない。[12] しかし、文脈主義者はそうは言ってはならない。というのは、われわれは最初から叙実的な知識帰属を問題にしてきたつもりだし、文脈主義者も間違いなく叙実的な知識帰属を問題にしていたからである。たとえば、最初の例でハンナが自分自身について「知っている」／「知らない」と述

べたとき、彼女は反事実的な知識帰属をしたのだろうか。そうではない。彼女は自分自身の事実を表明したのである。したがって、ハンナがビルについて「知らない」と述べたとき、彼女は事実としてのビルの知識に言及したのでなければならない。[13] そうだとするならば、ハンナは、彼女の実践的事実に基づいて、ビルの知識を記述したことになる。しかし果たして、とある人の事実と相対的に、別の人の事実を述べることができるのだろうか。

ひとつの方策として、文脈主義者は、高いコストを引き受けているということをビルにとっての事実にするかもしれない。しかし、設定上ビルは、ハンナの実践的な状況を知らないのである。それでもこの高いコストを、彼にとっての事実だといえるのだろうか。これが認められるならば、その高いコストは誰にとっての事実にもなりうるように見える。文脈主義者がこれを否定しようとするならば、彼らは、個人の事実として認められるものの境界について、難しい問題にコミットさせられるように見える。それゆえこの方策は、コストや事実という概念について、説明を要する様々な問題を投げかけるように思われる。

もうひとつの方策として、知識帰属を主体の事実の記述としないという考え方があるかもしれない。知識帰属を、合理性に関する帰属者（すなわち話者自身）によるある種の判断の記述、とする考え方である。この考え方の下では、知識帰属とは、とある実践的なコストが想定される状況で、とある証拠の強さに裏支えされた関連する信念を持った主体が、その信念に基づいて何らかの決断をすること、あるいは何らかの行為を実行することが合理的である場合に成立するものと考えられる。したがって、とある話者が「知っている」と口にするとき、その人は、関連するコストと関連する証拠の間にある種の合理的関係を認めている。それゆえ、その話者はその発話によって、合理性についての自身の判断を表明していることになる。[14] つまり、ハンナがビルについて「知らない」と発話したとき、ハンナは、ビルについての事実を報告したのではなく、ハンナ自身の判断を口にしたに過ぎない。

しかしこの場合、事実の報告としての知識帰属が行き場を失ってしまう。というのは、この観点は実質、「SはPと知っている」という形式の主張を、その話者は、SはPと知っていると判断する、という内容を持ったものとして解釈するものだからである。知識が合理性を含意するとしても、知識として認められる合理性をSが持っているということを事実として報告したいとき、われわれはなんと言えばよいのか。もちろん、「事実としてSはPと知っている」と言えば間違いはないだろう。しかし、われわれはそれによって、「SはPと知っている」という端的な発話に、判断としての内容を優先的にあてがうのだろうか。

とはいえ、事実についての判断というものを考えることができる。われわれはしばしば、直接には観察できない物事を事実として主張する。たとえば、とある医者が太郎を診察して、「太郎は風邪を引いている」と口にする。これは、然るべき根拠に基づいたその医者の判断のようにも見えるし、太郎の事実を記述した発話であるようにも見える。これと同じように、ハンナは、ビルは知らないという自身の判断を述べているようにも見えるし、ビルは知らないというビルについての事実を主張しているようにも見える。

この問題に踏み込む前に、不変主義がこのあたりの問題についてどのような態度をとるかを見ておこう。不変主義者はひたすらに、主体の実践的事実と証拠的事実から、その主体自身の認識論的事実を報告している。彼らの立場は、その主張の構成要素が個人の事実の中に閉じているという点で、叙実としては構造的に非常に健全である。

ところが、不変主義者も結局のところ、知識帰属を、実践的要素と証拠的要素の間のある種の関係の判断と見ているのかもしれない。したがって、主体についての叙実と、話者自身の判断の違いについて、不変主義も同じ問題に巻き込まれている。だが、不変主義者は、ハンナの、ビルは「知らない」という発話をビルについての叙実だとは認めたくない（あくまで、ハンナ自身がその判断を表明したものとしたい）。

そこで、不変主義者は次のように論じることができる。まず、不変主義者は、医者の例に見られるような、判断と叙実の境界の問題にはコミットしない。ただし、ハンナの、ビルは「知っている」については、これをハンナ自身の判断でしかありえないと考える。医者の例とハンナの例の違いは、その述語付けの根拠が当の主語についての事実に閉じているか否かにある。つまり、ハンナの主張の「知っている」は、ビルについての事実のみに基づいて述語付けられてはいないが、医者の例における「風邪を引いている」は、太郎についての事実のみに基づいて述語付けられていると考える。要するに、主語についての事実で閉じている発話は、話者の判断でも主語についての叙実でもありうるが、主語についての事実に閉じていない発話は、話者の判断でしかありえない。

もちろん微妙な事例も存在する。一例としては、推論に基づく判断もまた、同時にその判断に基づく叙実のようにも見える。たとえば、とある人がある夜、月を見上げてからしばらく考え込んで次のように言ったとする。「太陽はいま、地球のほぼ真裏に位置する」（もちろん、地球のその人の位置から見て真裏という主旨である）。この人は、天文学的な知見を活用して、現在の月齢や月の位置などなどから、相対的な太陽の位置を割り出したのである。これは、この人の判断か、太陽についての叙実か。この発話が、太陽についての叙実であるならば、先ほどの方針に従う限り、この発話は太陽についての事実で閉じていなければならない。しかし、この人が参照しているのは、主に月についての事実であったり、その他天文学一般の理論であったりする。ならば、この例は叙実ではありえないのか。

ここで、大雑把ではあるが、ハンナの例と太陽の例に重要な違いを見ることができる。「太陽はいま、地球のほぼ真裏に位置する」という主張は、体系的な天文学の知見に基づいた主張である。したがって、話者が参照する事実が直接には月についてのものであるとしても、その体系的な知見を参照することによって、比較的簡単にそれを太陽についての事実に還元できる。しかし、ハンナの例では、ハンナの事実をビルの事実へと還元することを許容するような理論は、少なくともはっきりとは存在していない。

こうして、われわれは再び一つ目の方策の問題に引き戻される。すなわち、知識帰属において、帰属者の実践的事実を主体の実践的事実に還元することが許容されうるかどうかが再び問題になる。もし、これを可能にする理論を知識帰属に特有の理論として構築するならば、それはア

ドホックに見えるであろう。かといって、話者一般の事実をその発話の主語一般に還元できる、という理論を構築するならば、それが厳しい条件に基づいた理論であるとしても、非常に綱渡り的なものに見える。これは文脈主義者が説明すべき大きな問題であろう。

5　最後に

本稿で私は、文脈主義や不変主義が扱っている知識帰属を叙実的な知識帰属と理解した上で、その叙実的な知識帰属の理論としての、文脈主義の問題を指摘した。したがって、文脈主義のテーゼは、われわれの直観をうまく捉えているように見えるが、意味論的テーゼとしてはどこか無理があるようにみえる。この点からわれわれは、直観をとるか理論をとるかという二者択一を迫られているように見える。直観をとると言うならば、われわれは、これまでの意味論を塗り替えるような強い理論を提示せねばならないだろう。他方、理論をとるならば、われわれは、われわれが問題にしている直観が、文脈主義者が主張しているような仕方での意味論的直観に見える理由を説明せねばならない。そのひとつの有力な候補が、既に言及した、文脈主義者は語用論的直観と意味論的直観を取り違えているという戦略だが、この戦略の問題点もまた、上記のとおり既に DeRose によって指摘されている。なお、この DeRose の指摘を克服する試みが Brown（2006）によって提出されているが、語用論を頼みの綱とする方策一般には、根本的な困難が伴うように私には見える。というのは、この方策は、意味論的直観と語用論的直観の区別というより厄介な問題を呼び覚ましてしまうように思われるからである。[15] したがって、この反直観性について不変主義の側にも説明が求められているのが現状である。

【註】

（1）John Greco は、帰属者文脈主義と主体感知的不変主義の対立を、関心依存的主体感知的文脈主義と関心依存的不変主義の問題にシフトさせ（Greco（2008）II.2 節参照）、その結果、文脈主義に有利な議論を提出するが、私が問題にする対立はこのシフト後にも持ち越される対立である。

（2）DeRose は次のように書いている。「HIGH［切迫度が高いとされる文脈の実例］における引き上げられた認識論的基準が、切迫し、かつ非常に実践的な関心に結び付けられるならば、したがって、その状況を前提して合理的であるように見えるならば、そして、LOW［切迫度が低いとされる文脈の実例］における低い認識論的基準も、そこに関連する別の実践的状況を前提して合理的であるならば、関連する原文脈主義的（pro-contextualist intuitions）な直観はより強く、安定したものになる」（DeRose 2005: p.176）。

ここでは、文脈ごとに真理条件が変動するという直観は文脈ごとの切迫度の違いによって生み出されている、ということが言われている。ただし、DeRose のこの論文の主旨は、文脈主義者が依拠する直観とはどのようなものなのか、という点にあることに注意せねばならない。つまり、DeRose はこの時点では、その当の直観に基づいた意味論的理論を構築してはいない。彼はかつて、文脈主義的意味論にいくらか踏み込んだ議論をしたが（DeRose

(1995)、そこで論じられているのは、日常的な文脈が懐疑論者によって懐疑論的文脈に変えられ、同じ文の真理条件が変動するという例であった。したがって、そこでは切迫度のような実践的な要素は考慮されていない。つまり、実践的な知識帰属について文脈主義者（DeRose）が本当に何を語ろうとしているのかはいまだはっきりしない部分がある、という点は念頭においておく必要がある。

（3）この例のオリジナルは DeRose（1992: p.913）にある。ここでは、後に触れることになる Stanley の例との統一を図るために、Stanley（2005: pp.3-5）に即して、その登場人物をハンナとサラとしている。

（4）人によってはこの直観に共感できないかもしれない。しかし、他方で無視できない数の人たちがこの直観に共感するということも事実である。文脈主義にまつわる問題には、共感を得ているところのこの直観をいかに説明するか、という問題だけでなく、この直観を共有できる人とできない人がいるということをいかに説明するか、という問題も含まれている。この辺りの議論については DeRose（2006）を参照せよ。

（5）詳しくは DeRose（1999）参照。

（6）DeRose（2002）も、同じ論点をさらに広げている。なお、Brown（2006）は、DeRose のこの批判に真っ向から反論している。

（7）Stanley（2005: pp. 120-121）参照。

（8）以上の点は、Stanley（2005: pp.1-3）に基づく。

（9）Stanley（2005: p.3）。

（10）註2参照。

（11）Stanley（2005: pp.97-98）。

（12）たとえば DeRose（2005: p.189）は、自らの帰属者主導の文脈主義を擁護する議論で次のように書いている。

「話者にとって主体の状況に適切な基準を採用することが非常に自然である（そしてそうしないことは彼らにとって不自然ですらあるかもしれない）会話的状況のタイプの一つは、話者が、その主体が直面する（あるいは直面した、直面するであろう、直面しえたなど）実践的決断……を評価することに関してその主体が「知っている」かどうかを論じている文脈である。たとえば、「pと知っている場合に限り、彼女はaをすべきである」とか「うーん、彼がpと知っていたならば、彼は責任をもってaをできたのだが」とか「pと知っている場合に限り、彼女はpを主張すべきだ」のような。

彼が具体例として、反事実的な、あるいは仮定的な知識帰属を想定している点に注目して欲しい。

（13）文脈主義は、叙実的な知識帰属と、反事実的な知識帰属を同一地平で扱う野心的な立場であるという解釈がないわけではない。たとえば、文脈主義者であるところの David Lewis は、その様相実在論を援用することで、反事実的な知識帰属と叙実的な知識帰属の垣根を取り除くかもしれない。しかし、本稿ではこの問題には踏み込まない。

（14）Greco（2008）がこれに似た観点を採用している。「知識帰属（とそれと同種のもの）の真理値は、関連する実践的推理環境で稼動する関心と目的に依存する。ときにこれは、帰属者の実践的環境であるだろうし、ときには主体の、ときには誰か第三者のそれであるだろう」（p.433）。つまり、帰属者が自身の関心と目的から、その知識帰属が何を意図しているものかを設定でき、そしてその意図にしたがって、関連する実践的環境を自由に設定

でき、その上で知識帰属が診断される。もちろん、Greco 自身はこれを判断だとは考えていない。

（15）この意味論的直観と語用論的直観の区別に挑んでいる著作として、Cappelen and Lepore（2005）があるが、その試みが成功裏に終わっているようには思えない、というのが私の考えである（福田（2009））。

【文献】

Brown, J., 2006, “Contextualism and Warranted Assertibility Manoeuvres”, *Philosophical Studies*, 130: pp.407-435.

Cappelen, H. and Lepore, E., 2005, *Insensitive Semantics*, Oxford: Basil Blackwell.

DeRose, K., 1992, “Contextualism and Knowledge Attributions”, *Philosophy and Phenomenological Research*, 52(4): pp.913-929.

——, 1995, “Solving the Skeptical Problem”, *The Philosophical Review*, 104(1): pp.1-52.

——, 2002, “Assertion, Knowledge and Context”, *The Philosophical Review*, 111(2): pp.167-203.

——, 2005, “The Ordinary Language Basis for Contextualism and the New Invariantism”, *The Philosophical Quarterly*, 55(219): pp.172-198.

——, 2006, “‘Bamboozled by Our Own Words’: Sematic Blindness and Some Arguments Against Contextualism”, *Philosophy and Phenomenological Research*, 73(2): pp.316-338.

福田佑一、2009、「Cappelen, H. and Lepore, E., Insensitive Semantics」『年報人間科学』、大阪大学大学院人間科学研究科社会学・人間学・人類学研究室、30号、pp.191-196.

Greco, J., 2008, “What’s Wrong with Contextualism?”, *The Philosophical Quarterly*, 58(232): pp.416-436.

Stanley, J., 2005, *Knowledge and Practical Interests*, New York and Oxford: Oxford University Press.

Contextualism and Invariantism: from a Factive Knowledge Attribution View

FUKUTA Yuji

Traditionally, it has been thought that knowledge is a constant property. If so, when you say that someone knows something you would attribute a constant epistemological property to him. But our actual uses of the term 'know' don't reflect this traditional account. Namely, our uses of 'know' seem to vary relative to a situation where we use it. Contextualists try to reflect this observation in semantics, while invariantists don't admit such semantic changes. For several years, this controversy between contextualism and invariantism has been carried out in broad range of fields involving semantics, epistemology and even pragmatics. In this study, I will focus on problems of knowledge attributions. I will argue that a serious problem would arise for contextualists, in so far as what they address is a problem of factive knowledge attributions.

Keywords : contextualism, invariantism, knowledge, knowledge attribution, semantics